

日系二世の第二次世界大戦

— 今村茂男「神風特攻隊員になった日系二世」を通じて —

The World War II . of the second generation of Japanese American.
— from “The Story of an American Kamikaze” written by Shigeo Imamura.—

山 本 茂 美

Shigemi YAMAMOTO

はじめに

今年になり日系文学について検索をしていた時ある二冊の本にめぐりあった。一冊は門池啓史の「日本軍兵士になったアメリカ人たち」^{注1}もう一冊は今村茂男の「神風特攻隊員になった日系二世」^{注2}という本である。門池氏は実業家で経営を後輩に譲ったあと大学で学びなおしている中で長年気にかけていた日系人、特に第二次世界大戦で日本と戦った二世たちのヒヤリングを通じて本にまとめ、また今村氏は合衆国生まれで日本で育った日系二世の自分史をまとめた。この二冊を読み進めるとき長年合衆国の日系移民の歴史や文学を研究する折、断片的に書かれていた第二次世界大戦勃発によって引き起こされた日系人たちの最大の悲劇を記録した貴重な資料になると考える。

今回は日系二世たちの歴史を振り返りながらなぜ日系人が日本軍の兵士になり最後は特攻隊となり日本のために命を捧げようと思うに至ったかを今村氏の自叙伝を通じて紐解くのみならず戦後日本と合衆国をつなぐためにどれだけ彼らが貢献したか、また他の日系二世たちが日本に派遣され自決する寸前の多くの命を救う役割を果たしたかを様々なインタビューを通じて本にまとめた門池氏の本の内

容にも触れながら述べていきたい。そしてこの本が英語で出されて多くのアメリカ人の元に届いたことの意義も考えていきたい。

1 日系アメリカ人二世と帰米二世

明治以降日本から様々な理由から多くの日本人が合衆国へ渡っていった。今村茂男氏は1922年8月14日、カリフォルニア州サンノゼ北五番通りに生まれた。父の敬次郎は愛媛県の石井村の農家に生まれた（現在の松山市）。一家は大変裕福で祖父は多くが水田である広大な農地を所有していたというが、二男だったのでほんの少ししか土地を相続できないことが分かっていた。今村の父は小学校を卒業すると夏目漱石が教鞭をとった松山中学へ進学した。当時は農家の子供で中学校に進学する者はほとんどいなかったという。彼は中学時代神戸に住む友人を訪ねたとき港に停泊しているたくさんの外国船に魅了され、その結果アメリカに行く決心をしたという。先にも述べたが中学を卒業したら職を探さなければならないことも頭にあったからだという。

合衆国に渡った多くの日本人は、暮らしができず渡米したものが多かった中で今村氏の父のような恵まれた条件での渡航者もわずかにあった。知り合いがフレスノの農場にいて

「アメリカの生活は日本で考えているほど楽ではないが仕事はある。」という手紙を送ってきたので1905年神戸から貨物船に飛び乗ってサンフランシスコ経由でフレズノへ向かった。しかし農業の経験もなく辛い仕事にとても辛抱ができず、1年も経たないうちにサンフランシスコに移りハウス・ボーイとして働いた後、大成堂書籍文房具店に定職を見つけ一軒家を借り一家を構えた。当時は写真花嫁として知られる写真一枚で結婚するという形態をとるものが多くその後アメリカ社会で多くの波紋を起こしたが、今村氏の実家は名士で、さらに祖父は村長であったこともありそのような結婚は認められなかったという。そこで隣村の橘家の三女久子を嫁に選んだという。橘家も村長を出している家柄で当時久子の父は校長だったという。^{注3}

アメリカに渡って暮しても格式のある家柄の出身であれば日本社会と同じような家と家の結婚であったことを改めて証明している。二か月を日本で過ごした後二人はアメリカに戻ったが、その時には今村氏は母親のお腹の中にいたという。こうして今村氏はアメリカで生まれ日系二世としてアメリカ国籍を持つことになる。このような結婚出産は少し形が違って同じような日系人二世の誕生につながっていったのである。

国籍取得に関して、日米両国は現在でも異なる法体系の下にある。現在でも日本は「血統主義」といい、両親のどちらかの国籍を子女は継承することになっている。これは明治32年国籍法として制定された。当時は父の国籍を継承することに定められており、海外で生まれても父親が日本国籍なら日本国籍を取得した。これに対してアメリカではアメリカで生まれれば両親がどの国籍でもアメリカ国籍を取得できることをアメリカ合衆国連邦憲法修正14条が規定している。その後生後14日

以内に内務大臣に届けをしない限り日本国籍を保有できなくなったが1931年の調査によるとハワイの二世の78%は二重国籍であったという。この問題は太平洋戦争までは問題にはならなかったが徴兵という深刻な問題が起きたとき様々な問題に直面した。

このようにアメリカ人であったが日本人でもあった二世たちを、両親は日本人としての生活習慣、文化を身につけさせたいと願い日本に送り出した。もちろんこれは日本に行かせるだけの金銭的余裕のあったものに限られてはいたが。しかし、もしアメリカに渡った日本人たちが日本を離れたことの意味を考え自分たちの子供がアメリカ人としての国籍を持っていることでアメリカで生きることだけを考えていたら、多くの帰米日系人にその後おきた悲劇はなかったことであろう。多くの日系人はアメリカに渡るとき一時的な渡米と考えたものが多かった。そこでアメリカの学校に通うだけでなく、夕方さらに週末日本人学校に通わせていたのである。アメリカ人社会に同化できないままに日系一世は日本文化に固執し、その姿がアメリカ社会では奇妙に映った。そしていわゆる排日運動につながっていった。その為、帰国する家族もあらわれた。

ここで日本に帰国した理由をいくつかあげておきたい。

1、家族全員による日本への帰国

1924年に制定された「排日移民法」に始まる一連の日本人差別に対してアメリカ生活に見切りをつけて家族をつれて帰国するものが多かった。または親のどちらかが死去して家族全員が帰国した。この場合後に子供だけ又帰米する例が多かった。

2、アメリカドルが円に比べて強かったので一旗揚げた親が子供たちを日本に送っ

た。これは先にも述べた結果である。

3、宗教関係団体の熱心な勧誘

仏教関係の熱心な勧めで日本の高等教育への留学の道があった。

しかし先に述べた心的要因についても述べておきたい。

4、日系人への差別

アメリカでは差別があり何とか大学を卒業してもよい就職先が見つからなかった。日本でもよい教育を受けさせ日本で就職させたいという親の願いがあった。

5、1931年以降の日本の世界への進出

アメリカで生きるよりも力をつけた日本へのあこがれが子供たちを日本へと導いた。

6、日本教育への願望

これも前述したように日系人社会では日本人学校に子供たちを通わせ日本の文化や習慣を教えようとした。多くの日系人の家には天皇、皇后の肖像画がかけられていたという。これらの様子は当時の日系新聞に多く見られる。

この様子がますますアメリカ人社会では奇異に映ただろうと今村氏は述べている。これまで多くの日系人の自叙伝を読んできたが必ずと言っていいほど日本人学校の思い出が書かれている。しかしアメリカの社会での教育では満足のいく結果が得られないと考え子供たち、とくに娘たちを帰国させたという。

2 日本での生活

今村氏は地元の金門学園を3年通っただけで5年に飛び級していたそうである。まったく順調だった彼のアメリカの生活を変えたのは先に述べたいくつかの理由の1つによる両親の決心だった。初めは母と二人で一年後には父も日本に戻るとのことだった。この時

まで今村氏は単なる日系人だったことが当時の思い出とともに語られている。

さて東京について母子は親戚の夫婦に案内され4日を過ごしたのち大阪からさらに連絡船で瀬戸内海を渡って松山に着いた。そして学区の番町小学校に転入した。アメリカでは5年生になっていたが中学の受験のために、4年からやり直すことになった。講堂に案内されたとき当時は男子は坊主頭であったのに彼だけは長髪だったので周りからは興味津々だった様子が書かれている。今村氏が驚いたのは校長が天皇皇后の肖像写真が飾られた壇上で教育勅語を読み始めたことだった。今までアメリカの教育を受けていた今村にとって低学年の子供たちの様にくすくす笑うこともできたと思うが、本の中で「不思議な威厳に打たれた気がした」と述べている。^{注4}今村氏はとても柔軟で寛容な心の持ち主だったのであろう。そして周りの環境に素早く順応していく才能を持っていたことがその後の生活の描写でもよくわかる。昼ごはんに弁当を持参したこと、修身の時間があったこと、このようにアメリカにはなかった様々な授業や習慣についても客観的に書き綴っている。大切なことはこの本が英語で書かれていたことである、自分がどうして日本の軍隊に入り一番過酷な空軍の特攻隊に導かれたかを時代を追って丁寧に述べている。読む者は「日本は選ばれた民族のための神聖な国である。」と説き信じ込まされていく過程を客観的に追うことができる。それはアメリカで過ごして体験があったからに他ならない。しかし大きなうねりの中に今村氏もやがて呑み込まれる時がやってきた。

一年後に帰国した父が驚くほどに日本の軍事力の強大さや日本人の高貴さを語るのに何のためらいもなくなっていたと書かれている。それだけ日本の国は戦争に向かって急速

に進んでいたのだろう。何も体験のない私たちも多くの若者がなぜ国のために命を捧げようとしたかこの本を読むと理解できる。日系二世が442部隊に入隊して多くが命を落としていった過程は何度となく研究してきたがそれとは全く違った理由を改めて知ることになった。国民には不都合なことは何も知らされず日本の偉大さだけが教え込まれていった。

今村氏は松山で最優秀の中学校に入学した。それは父の母校であり地元の優秀な学生が集まる学校だったからだ。中学に入学してすぐ彼にとって最も重要な出来事が起きた。アメリカから戻り流ちょうな英語を話す子供がいることを聞きつけた松山中学の英語と音楽の山内という教師が今村氏の家を訪ねてきて、松山に住むアメリカ人家族を紹介したいと言ってきた。山内先生はこのまま英語を使わなければ、きっとすべてを忘れてしまうから週に一度その過程を訪問するよという提案だった。この頃はまだ日系人としての思いが感じられる。

今村氏が訪れたのはメソジスト派の宣教師リーズ・ギューリック夫妻の家庭だった。彼は日本がアメリカとの戦争が差し迫ったために神戸に避難するまでの10年間訪問を続けた。おかげで戦後日本がアメリカに占領されたとき日米の懸け橋となるような通訳ができたのであろう。そして彼の自叙伝を英語で書くことはできなかったと回想している。

日本は満州を支配しさらに侵略の道を辿っていった。第一次世界大戦の後少しずつ疎外されていき、さらに軍国主義が加速していく。今村氏は、中学時代の様子を簡単に紹介している。これは本人の記憶によるもので歴史的な信憑性はないという。しかし彼が音楽部に入り楽しい学園生活をしてきたことは読み手によく伝わってきた。アメリカから戻ってき

た彼を周りの者が温かく受け入れていたことを伝えたかったという。今村が五年生になったとき進学について決めなければならなかった。本人は慶応か早稲田に進学したかったようだが幼い弟の世話のため松山に残らなければならないと父親に言われた。母親は看護師であったので戦争の激しさを増すにつれ母親が家にいることが難しくなったからだ。

そこで友人が入った海軍兵学校にあこがれたが、父は息子の命を国に捧げるつもりはないと又反対したので松山高校を受験した、しかし合格できず浪人することになったが海軍への憧れは続き、秋に海軍兵学校を受けた。結果は不合格だった。春になって松山工商を受験し結局ここに進学することになった。

ここで、同じように日本に戻り日本で高等教育を受けさせたいという親の意向で日本の大学に進んだ二世の話を紹介したい。アメリカの日本語学校で勉強した齊藤ベン孝雄氏は母と姉妹とともに日本に戻り福島の尋常小学校に通っていた。アメリカから来た一風変わった転校生に興味は示したが、アメリカ社会のような差別を受けることはなかったという。このことが戦争になった時でも日本に残った二世が多くいた理由の1つかもしれない。齊藤は尋常小学校卒業後地元の中学校に進学したが、アメリカ人牧師がアメリカ生まれで英語の堪能な齊藤氏に青山学院中学校への編入を勧め青山中学に通うことになった。青山中学は当時から英語教育に熱心だったので向いているとその牧師は思ったという。青山学院にはアメリカ生まれの二世が20人ほど在籍しており彼らとは仲が良かったという。彼は将来アメリカに帰国する希望を持っていたので軍国時代の不穏な空気が広がり、アメリカに残っていた父親が息子の日本国籍離脱の申請をしていたが間に合わないままに日本から徴兵されることになった。

「徴兵は仕方ないと思ったのです。国籍離脱届けを出したことはアメリカにいる父から知らされていましたが、何せもう日米戦争でしょ。離脱が日本まで届いているかどうかなんて全く危うかったですから。戦争は殺し合いなので、喜んでいくなんて思っただけで、日本政府の命令なので従う他はなかったです。」

徴兵された当時のことを振り返って齊藤氏はこのように語っている。帰米日系人の研究に至っていなかった当時、アメリカ本土の日系人たちの混乱は多くの資料や自叙伝で研究しわかってきた。差別に苦しみながらもなんとか暮らしを安定させようとしていた日系人たちの生活を奪い日系人を砂漠の有刺線の中に追いやったのはパールハーバーへの日本帝国軍の奇襲攻撃であった。あの攻撃さえなければ日米の多くの人々をこれほど苦しめることはなかったのにと常に考えてきた。しかしこのころ日本に残った多くの日系人も同じように苦しんでいたことを知り更なるショックを受けた。さらにアメリカに生まれ育った多くの日系人が国の大きな流れの中で自ら軍隊に入ったことや齊藤氏のように仕方ないと悟る時代の恐ろしさも感じている。それでも強制収容所に入れられた日系人がアメリカへの忠誠を誓う手段として442部隊の参加を問われた事例と比べたとき、これ以上家族がアメリカ社会で差別に苦しまないようにと自らの意志で軍隊に入った二世たちのほうが幾分救われるような気がした。

3 軍隊への道

1943年8月今村氏は飛行科予備学生試験を受け交渉から7人が合格したという。9月7日校長室に7人は集められ簡単な卒業式を行った。この時の校長の言葉を今村氏はこのように書いている。

「あなたたちの卒業証書は少し遅れて家族あてに送られる。軍人としての成功を祈る。自分を大事にして生きて帰ってくるように。」^{注5}

この最後の言葉を今村氏は信じられなかったと述べている。当時の戦況を考えると、軍隊に入るといことはほぼ確実に死を意味することを誰もが知っていたのだ。自分でないことを祈るものはいたがその当時の合言葉は「天皇陛下と皇后のための名誉ある戦死」を覚悟していたという。アメリカに生まれアメリカの文化にも触れた今村氏がなぜここまで日本の社会に染まっていたのか不思議に思う反面、それだけ日本が狂乱の時代だったのだろうと思う時今まで以上に過去の日本の歴史を脅威に感じている。

今村氏は9月13日に松坂に到着するために前日父とともに松山を出発した。荷物を運ぶのを手伝うために父が付き添ったという。「連絡船に乗った時気持ちの上では惜別の思いより軍隊に入る誇りのほうが勝っていた。」と回想の言葉を述べている。今村氏はその後も感傷的な気持ちより常に軍隊に入り日本のために戦いたいという気持ちで予科練での生活をしてきた。細かい身体検査と飛行適正性検査を受け、さらに精神的適性検査を合格し士官相当という地位に就いた。1943年が終わり1944年になるころには日本の軍事優位の地域が狭くなったことを海軍士官の仲間に伝わっていたという。しかしこれを知っても「俺たちが行くまで持ちこたえてくれ。」という気持ちだったという。生まれ故郷の仲間たちを敵にまわし、なぜこのような日本人そのものの気持ちになったのは謎に感じるし今村氏も後の感想でそのように述べている。予備学生として訓練している生活で常に語られていたのは「なせば成る」という言葉である。今村氏を含む多くの仲間はこのモットーに導

かれ多くの苦難を乗り越えていく。

今村氏の自叙伝の中で、その後飛行訓練を続け海軍の中で地位を高めていったことが述べられている。その後特攻隊に入ることになるが、その折々周りの仲間が銃撃され命を落としていっても今村氏は祖国を守るためまっすぐに歩みを進めていく。どこまでも日本人としての生き方をする。1945年2月11日午前6時過ぎ通常の訓話ののち、今村氏の軍司令官から「特別攻撃隊」を結成するように海軍軍司令部から命が下ったと伝えられた。その任務の自殺攻撃的な意味合いに触れるのを避け、希望者を募ったという。この時長男や一家に残った唯一の男子であったり、さらに妻帯者は志願する必要はないと言われたそうである。それにもかかわらず指導教官たちのみならず予科練生全員が全く同時に志願したという。彼は自分が長男だということを考えもせず命令を聞いたとき自然に身体が動いたという。祖国のために自ら進んで死を選ぶことは最もなす価値があることだったそう。日本中が取りつかれたように戦争にひきつけられていった実態が垣間見られた。

それからは毎日飛行訓練を続けた。攻撃目標地域までは編隊で近づき、そのあと、各機が散開し自分自身の目標を探し出し各機がそれに突っ込むことだった。あるいは、もし編隊が攻撃目標地点行く途中で敵の戦闘機に襲われた場合、逃げ延びるためにちりぢりになること、その後、もしも逃げ延びられたら敵の襲撃が終わった後で編隊に戻ることもあった。彼は本の中でこのように語っている。

「このような中間練習場で、はるかに高速の敵戦闘機対抗することは、絶望的な思いがあった。しかしわれわれは、自分たちの任務を必ず決行することを心に誓った。われわれは訓練に全身全霊を注ぎ込んだ。」^{注6}

こうして日々訓練をして飛び立つことを目

標にしていたが練習の折にも敵の弾丸にあたり頭がなくなった形で墜落するなど多くの悲劇を経験した。しかしその間に日本は戦争に負け、降伏の道を選んだのであった。奇しくも今村氏は自分の命をつなぎこのような自らの体験をアメリカ社会に伝える役目を果たしたのである。

さて日本国籍を離脱する前に徴兵された斉藤氏はフィリピンへ送られた。激戦地であるその地で多くの軍隊の仲間は命を落としていった。斉藤とともに壕にいた仲間はほんの少し外に出た瞬間頭を撃たれて死んでしまった。次の瞬間斉藤自身も撃たれ右手を負傷した。亡くなった兵士の衣服を裂き応急手当てをして壕から出て川までふらふら辿りついた後意識をなくしたという。夢の中でシアトルの風景と福島風景が混ざって見えパンケーキと味噌汁がかわるがわる登場しては消えたと記述している。この記憶は日系アメリカ人として生まれた斉藤氏だからこそありえたことであると感じている。彼の運命の皮肉を感じる一方で助け出されたアメリカ軍の刑務所にある病院で看護された時に、自分が日系人だと知ったアメリカ軍の配慮で同郷のシアトル出身の看護師を担当してもらえたという。心うち解けていくうちに二人は同じ小学校の同学年であることが分かったという。おかげで手厚い看護してもらい命を繋ぐことができた。その後は日本軍が管理している病院に移り元気を取り戻した。そこでの役目は米軍と日本軍との通訳として働いたと述べられている。彼はアメリカに生まれアメリカで育ったことの意義を初めて感じられたと回想している。彼は日本に戻りGHQの通訳をして暮していたが、日本軍に入った日系人はアメリカ国籍を奪われ、さらに不法入国と外国人登録法違反のため国外追放になった。彼もアメリカに戻り3年後にやっとアメリカ国

籍を回復した。この体験を伝えた後齊藤氏は「自分の人生を語る時日本にもアメリカにも感謝している。」と述べている。

4 戦後の活躍

今村氏は戦後実家に戻ったが何をすればいいのかわからず絶望状態だったという。亡くなった仲間のことを回想しながら仲間はなぜ死ななければならなかったのかを問うていた。戦前の神聖なものとは何だったのか、天皇は本当に神聖だったのか自問した。そんな時まだ祖国も日本人も終わっていないと感じ彼は国のために何かしたいと思えるようになったという。数日後中学校の時に英語を忘れないようにとアメリカの宣教師の家庭を訪問する機会を与えてくれた山内先生にアメリカ軍の通訳の仕事を紹介してもらった。主には日本語の新聞記事の英訳で、アメリカ人将校たちが愛媛県や松山市内で何が起きているか、そしてそれぞれの出来事に日本国民がどう対応しているのかを知るためのものだった。彼の職場には多くの日系人が通訳、翻訳者として働いていた。その傍ら公民館で子供たちを集め子供たちに英語を教えていた。周りで多くの英語が耳にされるようになり子供たちは英語に強い興味を抱いたのである。

1948年松山外語大学の設置を考えられ今村氏は学部で英語を教えてほしいとの依頼を受けた。米軍の仕事をするうえで今後の教育分野でよい通訳・翻訳者になるのに役立つということでアメリカ軍は仕事を掛け持ちすることを許可した。大学だけでなく付属の中高の学校でも英語を教えた。時が流れ日本に軍国主義がなくなったことを確認しGHQは解散することになった折、愛媛県軍政部指揮者の大佐の英語教師指導者として雇うべくGHQの司令官アレンジしていつてくれたと記述されている。初めてこの本のタイトルを見たとき

私はなぜ日系アメリカ人二世が特攻隊員になったのか強い興味を持った。本を書いているのだから生き残ったことは推測されたが、その経緯には想像を超えたものであった。本を読み進めるうちに今村氏が本当に書きたかったことは特攻隊という日本人でも数少ない経験をしたことではなくその後の生き方だったのだろうと思うようになった。

1949年から55年まで教育委員会の英語科指導主事だった間に1951年から53年までミシガン大学に留学した。そして55年に大学教育学部英語科の講師になった。在職中ミシガン州立大学の外国人学生のための英語研修センターの設立支援の要請を受けた。愛媛大学に戻りその後2年サンフランシスコ大学の客員教授を務め、又甲南大学の甲南イリノセンターの所長を務めた。さらに青山学院国際政治経済学部を新たに創設するに際し学科主任教授への就任要請があったため日本に帰国。さらに獨協学園が姫路に新設した大学の教授及び学科長として招聘を受けた。こうして今村氏は日系人として暮した10年の経験を生かして、両国の懸け橋として精力的に活躍した。彼はこの本でこの様に回顧している。

「通訳・翻訳者の仕事を去るに際し、およそ27年間のそれまでの人生を振り返ると胸が一杯になった。私はアメリカで生まれ育った。両親が私を連れて日本に帰国する決心をしなければ、私はそのままアメリカで暮らし続け、おそらくは他の日系人たちとともに強制収容所へ送られるという悲しい体験をし、そして多くの2世GIたちと同じようにアメリカ合衆国のために戦って死んでいたかもしれない。…日本に帰り自分を少しずつ新しい環境へ適合させ、自分でも気づかないうちに、完全な日本人、いや、実際は当時の平均的な日本の若者よりもっと日本人になっていた。最後はアメリカ人を自分の敵と考えるようになり、

日本を守るために進んで自分の命を懸けたのだった。…

私は、自分がアメリカ人と日本人の両方に役立っていることに気づいてからは自分の進駐軍での仕事に誇りを持てるようになった…ある意味では、私はアメリカ人として生を受け、日本人に生まれ変わり、そしてその後、その中間的な存在へと回帰して言ったといえる。…私は一生を通じて苦闘することになるだろう。』^{注7}

最後に彼の本はこのような文で終わっている。

「争いは、政治や経済、宗教そして人種といった種々の理由で生じる。特に悲惨なのは、過去の哀しい歴史を繰り返すことだ。私は、戦争中の経験を思い返すたびに、日本とアメリカの双方が、多くの人命を犠牲にしてまでもお互いに戦うごとに何の価値もないという、今日では容易に理解できることを当時気づくことができたら、と思わずにはいられない。客観的に見て、戦う価値のある戦争などというものがあるだろうか。自分の経験と考えるではあり得ない。私は、この本がそれを証明する助けになることを願っている。』^{注8}

今村氏はその後青山学院と獨協大学で教えたが最後には獨協大学で定年まで教えたという。

終わりに

今村氏は110%の日本人だったこと自ら述べている。又特攻を志願したことを死ぬまで後悔しなかったということである。100%アメリカンキッドだった著者がどうして110%の日本人になったのかを私たちは今村氏が残していったこの本を何度もあらゆる角度から読み直してみることで答えを見つけ出せるかもしれない。この本を読むに当たり、帰米と

呼ばれる二世たちのコメントや奇妙な運命のために日本の軍隊に入らざるを得なかった日系人の体験談も多く読んだ。今まで日系移民、とくに二世の戦争中の体験談を研究してきた。多くの悲劇にも打ち勝ちアメリカ人として生き抜いた二世の生き方は多くの人々に知られるようになっていく。しかし今村氏のような日本人として生きた日系人や日本国籍を離脱することができず、日本に戻っていた間に戦争になり徴兵された悲劇の日本人もいたことを我々はもっと知らなければならないと痛感している。

今村氏が110%の日本人になっていった当時の社会と同じ社会が今脅威となっている。同じ悲劇が繰り返されないようにどんなことがあっても戦争をしてはならないことを心に強く刻んでいる。

注

- 1 門池啓史, 日本軍兵士になったアメリカ人たち, 元就出版, 2010, 東京。
- 2 Shigeo Imamura, The Story of an American Kamikaze, American Literary Press, Inc.
- 3 Shigeo Imamura, The Story of an American Kamikaze, American Literary Press, Inc. p16.
- 4 Imamura, pp34-36.
- 5 Imamura, pp49-50.
- 6 Imamura, p88.
- 7 Imamura, p230
- 8 Imamura, p231

Works Cited

- 1 門池啓史, 日本軍兵士になったアメリカ人たち, 元就出版, 2010, 東京。
- 2 Shigeo Imamura, The Story of an American Kamikaze, American Literary Press, Inc.

Works Consulted

- 1 植木照代ほか, 「日系アメリカ文学 三世代の

- 軌跡を読む」, 創元社, 1997年, 東京
- 2 ジョン・オカダ, 中山容訳; 「ノーノーボーイ」, 東京, 1981
 - 3 Danieru.k.Inoue, Journey To Washington, 1967, Sairyuusya, Tokyo.
 - 4 海沢富 (トミ・カイザワ・ネイフラー) ,,Our House Divided, University of Hawai Press, 1991, Hawai.
 - 5 猿谷要; アメリカ史重要人物101, 新書館, 1997年, 東京。
 - 6 武智鎮典, 「442部隊の真実」, ポプラ社, 2012年, 東京。
 - 7 前山陸; ハワイの辛抱人, お茶の水書房, 東京, 1986。
 - 8 西山千, 「真珠湾と日本人」, サイマル出版, 1991年, 東京。
 - 9 山本茂美, ダニエル・イノウエの生涯—日系アメリカ人最初の上院議員の光と影—, AIT愛知工業大学研究報告, 48号, Vol48, 2013.
 - 10 柳田由紀子, 「二世兵士 激戦の記録」, 新潮新書, 2012年, 東京。